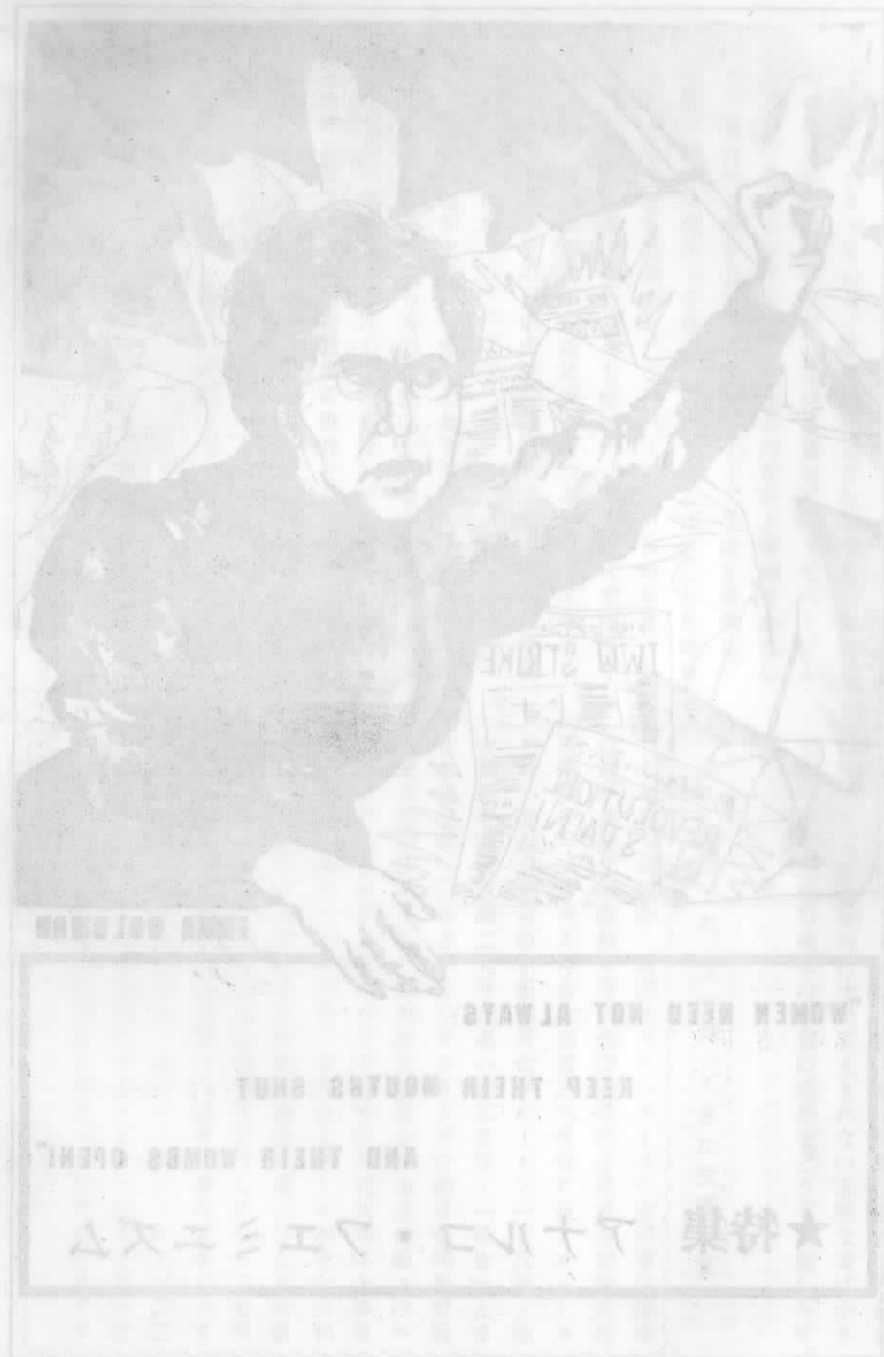




特別寄稿

アナーキズムと男性のフェミニズム

トベ・ラリー (Taub Larry)

私が最近のアナキスト誌や新左翼誌をみる限りでは理論についての論文が多い。むろんそれに関連して歴史とか個人についてのさまざまな社会運動、民衆運動を取扱ったものである。しかし最近では性の政治の流布につれ、西欧諸国の雑誌にはフェミニズム、またむしろ女性運動に関する真剣な論文が現われはじめた。特にアナキスト誌紙ではフェミニストでありアナキストであったエマ・ゴールドマンやルイズミッシェルのような知名人について言及している。そしてその書き手達は女性運動とアナキストの原則の間に類似があるのを指摘し、そこから「アナルコ・フェミニズム」なる語を作ったものである。

もう一つの特色は、彼等（アナキスト達・新左翼）は一個のグループを闘争の中枢に設定することなく、また革命的前衛として、その解放が他の抑圧を蒙っているどのグループよりも優先する重大事とは考えないのである。すべて運動は、またすべてのグループはあたかも多かれ少なかれ平等に処理される。この政策が旧左翼機

関誌紙の扱いと異なるのである。というのは旧左翼では労働者が闘争の中心であった。旧左翼にとって、人種グループ、女性、被抑圧少数民族、被抑圧植民地闘争等は、さようなものとして周辺闘争だった。そうした闘争は他のグループ内での労働者の解放または労働者階級の解放に貢献する限りで重要だった。

更に新左翼、アナキスト機関誌紙での顕著な特色はフェミニズムまたはフェミニストが論旨になる時は、通常、またそうでなくとも女性が書くことである。男は滅多に書かないし、フェミニズムや女性解放、或は女性アナキストの歴史的活動について書くのは僅少である。だから他の主題について同じやり方で提言されると、それは大体フェミニズムとは関係がない。そこでそうした論旨の書き方は殆んど男性ということになる。男の書き手が「女性の論点」から離れたがる理由は、女性の問題は女性自身語るのが適当だとして、男には資格がないとするからだ。しかし私はそこに別な無意識の動機があると思う。

ヨーロッパ諸国で運動に参加している男達の多くは「女性の問題」や性の問題は重要だと考えるにしても、（というのフェミニズムはさような諸国で生れ、女性が自分の問題を自分達の活動の中心に設定している）他の

問題や運動、或は偉大な男性活動の重要な理念とか歴史
的アナキストの理念に比べると重要度は落ちるとする。
だから男性活動家は、女が女にとって重要事を書くなら
それはそれでよい、男は「性解放」のような「重要でな
い」ことを書く要はなく、他のもっと重要な男の問題、
強固で精力的な主題に執着すべきだとする。

これと少し対照的なのは旧左翼の誌紙では、男女共に
女の主題を取りあげていることだ。しかし私が先に述べ
たように、旧左翼は一切を「労働者階級」の名辞で考え
「労働者」が革命的前衛だと信じているから、女性が「
労働者」として抑圧されているとか、「労働力」として
女性が参加する際だけ言及し、女が女として抑圧されて
いることは述べない。旧左翼にとって、被抑圧女性性は「
労働者」としてのみ問題になるのだった。つまり「女に
だけ特異な」問題は「ブチブル」と規定され取るに足り
ぬとされたのである。

ではアナキストや新左翼の誌紙が旧左翼のそれとこ
の点に關しどうして違ふのだろうか？ まず新左翼は正
統マルクシズムや体制政府や政党に対する幻滅感から発
展したことだ。幻滅の過程で、「労働者」は結局マルク
シストが常に言うような革命的前衛だとは思われなくな
った。他の諸グループや各種の民衆闘争だって同じよう

に前衛にいたると思われるのだ。彼等にとって、民衆は基
本的に「労働者」として抑圧されているのではなく、黒
人として、ヴェトナム人として、黒いアフリカ人、汚染
の犠牲者、女、ゲイ等々として多かれ少なかれ被抑圧の
序列にづらなっているのだ。労働者が革命的前衛ではな
いと考えれば、マルクシストの基本である唯物史観と階
級闘争の考えも拒否される。それで彼等は歴史が階級闘
争の連続であり、そこではある階級が権力を有する階級
に反逆して、その階級の特権を奪取するだけでなく、ま
たそれ自体で階級の区分も解消するという考えをやめて
しまったのだ。資本家が貴族に対して反逆し、貴族は消
滅した。二個の階級は最早分ち難い。今度はプロレタリ
アイトが資本家に反逆し、彼等は同じように消滅するだ
ろう。新左翼はこの種の階級闘争観と弁証法の幾分かを
否定するように思われる。その標語は「労働者に権力を
！」から「民衆に実権を！」へと代ったようである。新
左翼誌はその否定を表象している。

私はアナキストの遺産研究を始めたばかりの者だが
私の読んで知った限りでは、アナキストもまた正統マ
ルクス派の方向を拒否するとか或は少しく異なるかと思わ
れる。その理由は正統マルクシズムが国家または国家諸
制度廃絶の方向にあり、個人の自由と自治にむかいなが

ら、結局は階級的に組織され、強力に中央集権化した抑
圧者になるからである。この理由に加え、私にはアナキ
ストが階級闘争観や歴史の弁証法的流れを認めないよ
うに思われる。

しかし私にとって、それは実に良くないと思う。何故
なら男性フェミニストとして、(こういう言葉を好まな
い諸君にはお詫びする)階級闘争観、革命的前衛の観念、
それに歴史の弁証法的流れ等、マルクス、エンゲルス及
びその追従者達が一般化し発展させたものは僅かにしろ
非常に重要で、特にマルクシストの諸概念は否定される
べきではない。実にその諸概念こそ最も深い意味で真に
革命的な革命誌紙に反映されるべき筈のものである。

私達は「労働者」の革命的前衛役割に幻滅しているが、
それでも階級闘争、弁証法、革命的前衛の諸概念を拒否
すれば、それはタライの水と一緒に赤児を流すようなも
のであろう。「労働者」、むしろマルクシストの観念で
の労働者は(大体ハンマーとカマで表象される、男女だ
が、伝統的には男性とその仕事だ)最早、革命的前衛で
はない。嘗てはそうだった。しかし階級闘争の一連と
しての歴史の弁証法は未だに真実で最良であり、人はこ
れに「科学的」を加えてもよく、これまでの所人間の進
化をよく記述している。むしろ私のはマルクシストので

はなくフェミニストの弁証法だ。フェミニストにとって、
男と女はそれぞれの性的役割を通じて性的に抑圧されて
いる者であると自覚し、それらの役割を失くすことで性
的解放にむけ闘争しているのだから現代の革命的前衛で
ある。そこで歴史の弁証法は(単に経済的ではなく、
性心理的に深く)その人びとに流れているのだ。さよう
なものとして彼等或は私達フェミニストもまた弁証法的
現在の流れの前衛として、アナキストの世界へ向かっ
ているのだ。フェミニズムはアナキズムと同じような
ものに留まらないで、それこそアナキズムの刃であり
アナキスティックな運動の中で最もダイナミックである。
なぜ私はこんなことを言うのだろうか？ フェミニズム
とは実際には何んだらうか？

フェミニズムとは、シュラミス・フアイアストーンや
新女性運動のその他発起者達の言うラジカルフェミニズム
ムとは、唯に男性の特権の除去(これは一九世紀の最初
のフェミニスト運動の目標だった)にとどまらないで、
性差別の除去；人間にある性器の差異が最早文化的な問
題ではない、というのである。(参照 Shulamith
Firestone, *Dialectic of Sex*, Bantam
Books, 2nd Printing, 1972, p11)

私はこれを次のように理解する。例えフェミニストの目標が獲得できても男女はなお性的な差異がある。しかしそれで役割が違うことはないだろう。「性器それ自体は人間を二分する理由にならない。それは丁度皮膚の色や髪の色で区分できないのと同じです……」そこで「今日女性として規定される人びとが自分達の条件を改良するにはそうした規定を除去しなければなりません」

(Ti-Grace Atkinson, Amazon Odyssey, New York; Links 1974 pp 49, 53)

エヴリン・リードによるとフェミニスト人類学の最近の学派とマルクス、エンゲルス及びその追従者達―彼等は人類学の先駆者の諸作品に分析の基礎を置いている―は「原始段階を別にするとして過去の歴史は階級闘争史だ」と言う。(フーファイ・ストーンの「性の弁証法」P 4に依るエンゲルスの社会主義；ユートピアか科学的か：参照) 即ち原始時代は今日と同じく性的役割は区別があったとしても、両性は平等だったと言う訳だ。事実、女性の役割も少し重要で、社会の基本的労働役割の発展において動物的人間から人類へと女性を引きあげた。

この点について論争があるけれども原始時代に就ての記述は、人間には常に父系制また父家族が存続しつづけ

たとする論より一層論理的に思われる。即ちこの方の論議は単純な家父長制の偏見である。私はマルクシストフェミニストの視点が人類学的な証明と論理性におけるだけでなく、私が個人的に接した伝統から受けたものに徴しても、ヨーロッパ前史の人類学、神話学、また西欧人類学から独立しているものに徴しても真実だと確証できる。

例えば日本は一八六八年まで世界の他の部分から離絶されていたが歴史の諸階程は同じく弁証法的形態を経過し、世界の他の歴史と照応する。また日本では「元始、女は太陽であった。」「平塚らいてう、」が認められている。それが日本人の伝統であり、神話と歴史である。それは古代中国の紀記や日本の国民叙事詩「古事記」に保管されて居り、女性史の優れた学者達、高群逸枝のような人によって証言されている。

しかし最も信服できる意見は中根千枝さんのもので、この著名な日本の女性人類学者は日本の歴史と伝統に習熟しているだけでなく、アジアの他の地方の人類学にも親炙(しんしゃ)している。彼女は政治に関してマルクシストでもなければフェミニストでもないが、原始的平等の母系制から文明化する過程で産みだされた父系制の革命、成層型家父長制をマルクシストやフェミニスト人

類学の用語で書きとめている。

フーファイ・ストーンのような主要なラジカルフェミニスト達は、過去や以前の階級闘争に就いてマルクシストの視点を受入れはするが、新左翼やアナキストと等しく現在の正統マルクシズムに幻滅している。その理由は前述のものと違わず、正統マルクシストや社会主義国で女性が種々の仕方で搾取されるのを見るからである。

さような諸国では、革命後の初期の産業化や開発の過程で、労働が必要で、女性は「労働力」として求められる。しかもそれと同じくして、伝統的な女性の役割としての家事と育児等々の労働のすべてを果すことで搾取されるのだ。このようにして国家社会主義の諸国では二重の搾取―「労働力」と「家庭の仕事」―により働くことになる。正統マルクシストは女性問題は重要でなく、少くとも解決は後廻しにする。彼等は女性の育児の役割を男性に分担させるとか充分な家事用具を備えるとか、買物をしやすくしたりそれを開発することほしないで、私有化を減らし更に効果的な方式によって家族を家事や育児についての経済単位に置きかえるのだ。女性が必要と思うものは国家を動かす男達からはぜいたくとみなされるのだ。

例えばルーマニアであったように、人口減少の恐れが

あれば、女性に中絶を禁止して子供をもつように強制する。多分、オートメーションや開発がつづき「労働」が少くてすむようになると、女が家を離れて働くのは社会的圧力でやめさせられよう。「女性の聖化」が復興して、伝統的な家事に戻るのが「人民に奉仕」することだとされよう。正統マルクシスト諸党では女性が指導的役割や重要な政治活動をするのは勇気づけられていない。日本やその他諸国の左翼運動では男達が全く家父長的で女性に対する態度はブルジョアと変らない。女性には政治においてサービスの役割で働くのを求め、「重大」な政治は男性の役割としている。要するに左翼グループや諸国においては長い目でみるとか、女性が五〇%以上の指導力を把握しない限り、(一)ということは男性を女性化しない限り、大体がいわゆるまた性的役割の意味でも修正主義者にとどまるだろう。

修正主義が起きるとか左翼革命家が絶えず後向きになる理由は、私や他のフェミニストの考えでは、伝統的な役割が手つかずのまゝ放置されるからである。左翼人はそれを解消しようとはせず「女の問題」(Women's issues)と真剣に取組まない。男が父系の役割を強調する限りそして女性に男性の役割をさせ、男が女の役割をしない限り、革命は常に失敗するだろうし、また一個

の男性抑圧階級が別の階級にとって代るだけであろう。資本家が貴族（サマライ）を崩壊させ労働者を抑圧する。男性労働者が資本家を破り他の男女労働者を抑圧する。

私達が男と女の役割を分担する限り、子供の保育にも家父長家族やそれに類した家父長方式をもち続けよう。つまり家父長的なコミュニケーションやキブツがそれである。そこで子供達は男と女の役割を学び（それが君主制、封建制、資本制、男の社会主義社会等で、それらは不平等で抑圧的だ）そこで学んだ抑圧的性心理を自分達の仕事や政治にもちこむだろう。

伝統的な性の役割は男性の女性抑圧だけでなく性^{セックス}に対して一般的に加虐的態度で臨むものだ。ソビエト、中国、その他正統的マルクシストの諸国では、セックス、ホモセックス、自然なエロチシズムが禁止され否認されている。自然な性感をもった子供達がそれを感じただけで社会道徳を破るとされる。そうした正常な感覚を隠して自己から外れ、注意をそらす為に他者を指弾するようになる。かような社会的ムードの中で成長する人はその度合に応じて、体制従順となり厳格で構成主義で個人を抑圧する階級構造と強力な国家へと指向する。私に間違いがなければ、これがウイールヘルム・ライヒの著作で扱われた主題である。

あり、労働者の半数が女であることを忘れている。事実、女性問題と労働者の問題に差はないのだ。それからまた女の問題が男の問題なのも忘れている。例えば既婚女性が中絶を禁止されたら、多くの国でそうだが、その為に男性である夫は経済的に負担するのだから彼女と同じく労働者として更に抑圧を蒙る地位に立つことになる。

左翼男性はかような性心理・経済関係を深く考えると検討せずに非論理的答え方をする。「女性諸君、われわれのために働き給え。暫く待つて欲しい。われわれが権力を資本家から奪取するのを手伝って呉れたら（一七七六年と一七八九年なら）貴族から」と云うことだ（一七七一七七六年は米国の独立戦争、一七八九年はフランス大革命を指す）。きみ達の問題はわれわれが自動的に解決してあげよう」けれどその人達はこれがどんな風になるか論理的に説明できないのだ。そこで権力を奪取したら、やることと言えば、女性をもっと働かせ、出生率が低ければ「人民」にあてて子供を育てさせる。

貴族達（日本では天皇と貴族、次いでサマライ）が権力を持っていた時、商人が自己の役割を通商、取引、後の工業化によって発展させた。（アンチチーゼ）そしてブルジョア革命によって戦士達から権力を奪取した。米

私達の経済活動を産みだす性心理の問題を左翼人が扱わない、また重要としない事実を考え合わせると、何故現在の家父長的マルクシズムが究極の革命を創出し得ないか判るだろう。家父長制と性的役割を解消するフェミニズムのみが抑圧的経済システムの底流にある性心理を解消するのだ。それ故フェミニストは男女共に革命的前衛である。

この規模の論文では理念を大雑把に言うしかないが、シュラミス・ファイアストーン（性の弁証法）とか他のフェミニスト達をもっと明瞭にまた詳しく言及している。私としてはアナキストであれ誰であれ、本当に深く政治学への理解を持つ人なら、出るだけ直接にフェミニズムに習熟して載きたいと思う。直接とはマスメディアや正統左翼メディアによって歪められないものを通してと言う意味である。そして男性フェミニストグループに参加し女性フェミニストを支援するのだ。そうすれば彼等の男性の役割はなくなるだろう。

これらの真実にかかわらず、正統マルクシストや新左翼の多くの人が家父長的習慣や態度を捨てないでいる。最近のフェミニスト運動では左翼男性と女性フェミニストが、労働者の闘争と女の問題のどちらが重大かについて論じあっている。左翼人は家事や子供の養育も労働で

諸国では彼等は権力を妥協し緊張緩和によって得た。（ジンテーゼ）貴族が商人になり、二階級の区別に消滅した。次いで男性のプロレタリアートが自己の労働の役割を、彼等が発展するにつれ反資本家的に活用し始めた。即ち労働運動である。（アンチチーゼ）、ある諸国ではソビエト、中国、キューバ、ヴェトナム、カンボジアでのようにこの革命的活動は苛烈だった。けれど今日私達が認めるのは労働者はどこでも妥協によって権力を取っている。例えば巨大な労働組合、国家社会主義はヨーロッパ、日本、米国でそうしているのだ。これが緊張緩和（ジンテーゼ）である。資本家と労働者は異種の労働者になり、経済的階級差異は消滅に向っている。そこで性階級差だけが残るのだ。新しい前衛はユートピア的でなく科学的アナキズム、別言すればフェミニズムである。というのは性的役割の闘争は他の民衆闘争の中に共通した要素になるだろうから、そしてこの弁証法はとどまる所を知らない。そうではないだろうか？

私が未だ明瞭にできない理由づけが古代の教義にあり、それは弁証法的なフェミニズムでありまたマルクシストのものにも近いと思われる。しかもその起源が西欧にあるのではなく、西欧の経済、歴史、人類学とは関連さえないのだ。それは四個のユガ（サンスクリットで言う時

代」でヒンズの伝統と民話に起源をもっている。しかも今日まで続いているカースト(身分制)の周囲にこびりついているのだ。それによれば四個の広義の経済的カーストがある。ブラハーマン(司祭、哲学者、術者、知識人等精神の保持者)、クシャトリア(戦士)、ヴァイシバ(商人)、そしてシュドラ(労働者)である。黄金時代は精神と心が物質に調和していた。これは平等期であって誰でも彼や彼女のダルマ(仕事)をして、その性的力「イン(陰)、ヤン(陽)またシバとシャクティ」は平衡していた。大衆の上に立ち支配を語るのはシャーマン「シャウマン(みこ)」が術者だけだった。彼等は人間と自然の仲介者で従ってブラハーマンであった。これはマルクシストやフェミニストの言う前史または原始時代に対応する。それはまた動物が人間になり得た時代である。言う所によればこれは二期に別けられる。(1)収穫の時代即ち古石器時代(別の人は生蕃時代と言う)(2)農業と生活資の育成時代即ち新石器時代(別の人は野蕃時代と言う)―日本だとそれが伝説の母系制一部族期に当る。

次の三時代はムード的に物質優先である。クシャトリア(戦士)がブラハーマンから権力を取り、そこではもう誰も自分のダルマ(仕事)をしなくなった。戦士は男

であって、武器によって(銀の時代)平等な原始時代に対し父系制の革命をもたらした。これが有史の始めであり幾つかの理由によって二部分に別けられる。マルクシスト用語では(1)動産的奴隷(2)封建制で日本だと(1)京都、奈良の天皇制(2)鎌倉及び江戸のサムライ時代が対応している。それからヴァイシバ(商人)のカースト(資本家)が階級闘争を主導し金銭によって戦士から権力を奪取した。(銅の時代)これも二時代を有し(1)商業(2)産業革命で日本だと明治時代から現在の財閥までに当る。そこで現在シュドラ(労働者、むしろ男性的労働の役割を男女が行う)の興起にあたっている。これを私は鉄の時代即ちカリユガと呼んでいる。これも二つに別れ(1)オートメーション(2)サイバネーションとなる。

所で私が旅行中に採取したインドの教義では新しいブラハーマンがシュドラから権力を取ると考えられているようだ。精神―心―感情―肉体が再び平衡する新黄金時代が到来するのだ。むしろ性も平衡する。ソビエトで個人の反逆が起き民族的グループを抑圧するのはその始まりではないだろうか? 世界中で民衆運動が高まるのは? これは国際的で両性間でのフェミニズムがそれらのすべての運動の共通要素になる徴ではないだろうか? アナーキズムが最終ゴールではないだろうか? 人間を

創出した最初のブラハーマンの時代程それは続くだろうか? すべての相反を一致させるだろうか? 時間と永遠、生と死、人間と機械、物質と精神を? である。私には科学と宗教が相互に習合する方面しか理解できない。

それ故歴史をマルクシストの弁証史観ではなく、「性の弁証」¹としてラジカルフェミニスト理論から観ると、次のように結論できる。少くとも北半球の先進諸国における家父長的資本家階級と家父長的労働者階級は今やジレンマの段階、合一の状態にあるということである。男性資本家とそれを支える女性達、そして男性労働者とそれを支える女性達の区別は急速に解消し、「右」と「左」の闘争は無意味になりつゝある。更に言えば資本家と正統左翼がホールの右側に席を取り、アナルコラジカルフェミニストが新左翼なのだ。労働者階級自体と種々の正統マルクシストは最早革命的ではない。マルクシズムよりむしろフェミニズムが新革命理論として認定されるべきである。

私がアナルコラジカルフェミニストの語を使用するのは女性だけを意味するのではない。先に述べたように色々な理由で、革命的誌紙でフェミニズムにつき言及する論文は大体女性によって書かれ、男性が書くものはフェミニストの問題は討論されないし重要性が与えら

れていない。これは次のような理由によるのだろう。誰でも男性、女性、生粋の主義者、ゲイボーイにしろフェミニズムと女性運動は同じものだとするからである。

しかし現在の(1)新フェミニスト運動は両性の問題から出発しただけでなく、(2)男性の参加はラジカルフェミニズム理論に個有的ものである。更に(3)女性運動は階級と国民的境界をつき破って拡がり、米国と北ヨーロッパの境界を横切って動いている。思うにフェミニズムの目標は性的役割の解消であり、男性のフェミニスト運動が男性的性的役割解消を目標にしなければ達成されないだろう。

これは私のつまらぬ主張だろうか。私の知る限り、シモヌ・ド・ボーボワルの「第二の性」が出版された後数年して新フェミニスト運動が開始された。それは米国ではなくスエーデンで一九六〇年に政府後援の研究プロジェクトから出発したのだ。それがベティ・フリーダンの「女性の神秘」の三年前で、女性の全国組織が設立される六年前、米国で最初のラジカルフェミニストグループの創出される七年前、日本でウーマン・リブの出来る一〇年前だった。(日本は西欧資本主義世界の外でリブのある最初の国である)しかもこれはアナルコ・フェミニストグループの創出される一二年前に当るのだ。スエーデンでは女性運動としてではなく、両性の性的役割論

議として始まった。未だにその線上にあって、スエーデンでは女性運動ではなく、性的役割を解消するに当り両性の合意を得る事に基いた国策なのだ。スエーデンではこれが容易な方法である。人口が稀薄で均質な国では闘争するより合意しやすく、それだけ高度な寛容があるのだ。他の諸国では何かを達成するには攻撃的な力の運動が必要なのだろう。

ラジカルフェミニズムが何処でどのように始まったかを説くのはさほど重要ではない。繰返すが、フェミニズムは単純に「もっと多くの権利」「平等」「ウーマンバワ」「母系制」を求める女性の闘争にとどまらないのだ。それは性の区別、性の役割、男性と女性の役割の区別を解消するにある。だから女達だけがそして女性運動だけが男性の役割と女性の役割を同じく解消させるとするのは一つの立派な臆説に違いないが、私の信じる所では、それは正統マルクシストが労働者の闘争によって女性の役割を解消させるとするのと同じだ。私の印象では男性は男性の役割を解消するだけである。

というのは性の役割は補完的だから、つまり一箇の銅貨の両面だから、女性は男性がその補完的役割を解消しない限り彼女の役割のどれとて解消することはできない。これはフュイアーストンの指摘にあるように、階

級の役割は性の役割を解消しない限り解消しない。何故なら階級の起源は性の役割にあるからだ。同じように女性の性的役割は男の性的役割と同時にしか解消されない。つまり正統マルクシストの運動によって女の役割が自動的に解消しないように、女性運動によって男性の性的役割は自動的に解消はしないのである。

こうした主張が運動の実際と理論の両方から注目されるべきである。長い経験をもつ多くのフェミニスト活動家が既に指摘しているのは、女性運動は多くの男性の参加なしでは革命的方向性を失いやすいというのだ。運動がいつの間にか市民権を得て設定され共働され遂には日刊新聞の中でかすんでしまふ。表面的な成果がその革命的重要性に比べ過大に評価される。女性運動と共働するトリックは色々に仕組まれ、種々のイデオロギーによってあらゆる既成の家長的制度にとり入れられている。米軍、ソビエト政府、中国政府、イランの君主制においても同じである。私の知っているフェミニストの意見では、運動における共働と男性不在の理由は、労働階級の女性は中産階級の女性を支持するより夫達を支援したがるからである。だから階級内 (interclass) に根付かぬ運動は革命的ではあり得ない。この意見の持主のフェミニストによれば、異なる階級の女性達を一つの運動

に連れ込むには、その女性運動は労働者の闘争をしている男達を支援するとか支持を得なければならない、つまり労働者としての男達と共同するのだ、と言う。

私はこの分析には同意するが結論には異論がある。確かに階級内の支持はなければならない。けれど一国内の階級は諸国を通じての世界的階級構造の反映である。それ故国際的に家長制の優勢が明らかなのだから国際的なフェミニスト運動の必要性があるのだ。同じ理由で両性間 (intersexual) 男性と女性のフェミニスト運動も必要である。即ちフェミニズムには階級内と国際的と両性間の共働が必要なのだ。もしあるグループが他グループを代償に利益を得たとしてもそれは世界の何処かの隅か町でのことである。支配エリートは一被抑圧グループから次のグループへと打撃を加え決して受入れはしないのだ。

それ故フェミニストの目標を獲得する為には男性がフェミニストにならなければならない。

アナキストは運動と自由な社会組織について非常に真実なものを発見したように思われる。行動の基礎単位を小さな親和的グループに置くからである。しかし一般の事情では多くの場合、少くとも現状では混在した親和グループを作るのはむづかしい。むしろ男と女、ゲイと

主義者、黒人と白人、キリスト教徒とユダヤ人、労働者とブルジョア、子供と大人、四〇才以上と三〇才以下等がその混在した親和的グループを作れとか作るべきだと言うのではない。兎角男達はフェミニストになるべきで女性グループと接触すべきである。

それは一八世紀のデモクラシーにおいてと同じやり方である。即ち自由、平等、友愛、民衆、譲渡できぬ権利、すべて人は平等である等はブルジョアのものでもなければ巨大企業の専有物ではなかった。同じようにマルクシズムは男性労働者階級と労働者運動の専有物ではない。そしてまた同じようにフェミニズムは女性と女性運動の専有物ではないのである。イデオロギーはブラハーマンの心 (精神) の所産として、その目的においてユートピア的でアナキスチックだ。そして通常、そのシンボルの周囲に集る階級とか性を越えるのだ。フェミニズムはそのような仕方女性運動を越えて進む。

